

区分	コンセプト（看板）	想定される取り組み			行政が検討する 取組（案）	対象期間		想定される部門				想定される対応者		
		分野	施策	内容・課題等		～2030年	～2050年	産業	業務	家庭	運輸	行政	市民	事業者
中斜里（工場）	産官連携による 地域裨益型再エネの普及 （課題） 農業残差処理、トラック輸送の人手不足	再エネ（熱・電気）	熱電供給施設の導入、公共施設・工場間の熱・電力融通	工場の季節的な稼働を踏まえたエネルギー需給の平準化。コスト、安全性の保証が課題。	○	○	○	○			○		○	
		再エネ（電気）	農業残渣を活用したバイオマス発電など	現在はバイオマス発電（他自治体）や飼料として活用。一部未利用なものもある。		○	○				○		○	
		再エネ（熱・電気）	地域内でのエネルギー循環（木材有効活用など）	現在は木質バイオマスの確保は困難		○	○	○			○		○	
		交通	大型配送車への合成燃料の活用・運輸部門の取組推進	車両の更新頻度が長期的なことから、現在の車両を活用しつつ低炭素化を図る。		○	○			○	○	○	○	
農業	脱炭素と安心できる生産環境・生活環境の同時実現 （課題） 農業残差処理、トラック輸送の人手不足	再エネ（電気）	耕作放棄地、車庫や資材倉庫への太陽光発電設置	休耕地等、発電設備の設置可能性はあり		○	○				○		○	
		省エネ	農機大型化、シェアリングの推進	農機の更新頻度に合わせて長期的な視点から、低炭素化を図るとともに、効率的な運用に期待。		○	○				○		○	
		省エネ	農業機械の自動化等による効率運用の推進	効率的な運用による低炭素化。現在も自動運転技術はかなり普及。人手不足への対応も想定。		○	○	○					○	
		省エネ	農業機械の燃料の改質	農機の更新頻度が長期であることから、現在の農機を活用しつつ低炭素化を図る		○	○	○				○		○
		再エネ（熱・電気）	ピートバルブの利用（エネルギー利用）	現状、多くの農業残渣は飼料等として流通するなど処理手法が確立。可能性を有するピートバルブもバイオマスとして活用するには機械導入等の負担が課題となる。		○	○	○				○		○
		そのほか	畑地のCO2吸収・固定	畑地における有機物の含有量増加を図ることにより吸収・固定量の増加を図る。		○	○	○						○
漁業（海）	資源を守り育てる 持続可能な漁業を目指して （課題） トラック輸送の人手不足	省エネ	漁船の燃料改質・省エネ化	船の更新頻度が長期であることから、現在の漁船を活用しつつ低炭素化を図る。エンジン載せ替えに際して適時。		○	○						○	
		再エネ（熱・電気）	漁業残渣を活用したバイオマス発電など	現時点では堆肥等に活用		○	○				○		○	
		省エネ	センシング技術を活用した漁船運航の効率化	効率的な運用を図ることで低炭素化を図る。世代交代が進んでおり新技術への抵抗は少ない。		○	○	○					○	
		省エネ	冷凍・冷蔵の省エネ	冷凍・冷蔵設備の省エネ化は進んできている。		○	○	○					○	
地域間連携	知床を軸とした 地域間連携の深化 （課題） 若者に魅力ある雇用の確保、空港や大都市との移動手段の充実、地域医療や学びの場の充実、電線地中化等のインフラの整備	再エネ（電気）	既存の系統線や自営線を活用した地域再エネの地産地消	卒FITを想定した仕組みづくりの検討。産業界での連携も期待。	○	○	○	○			○		○	
		再エネ（電気）	地域間連携による再エネ融通	各地域の特性も踏まえた地域間での需給平準化を図る	○	○	○	○			○			
		交通	再エネ電力×EVによるゼロカーボンドライブの普及	地域間連携による広域な取り組みへの期待	○	○				○	○	○	○	
		そのほか	VRの充実による遠隔サービスの拡充	地域の強みを生かしながら暮らしの中でのサービス向上を図る		○	○	○	○		○		○	